

少年兵「護郷隊」の沖縄戦

恩納村誌戦争編の編さんにあたり、現在、体験者の聞き取り、関連資料の調査、避難場所、戦闘展開地点の確認など、さまざまな観点からすすめています。今年の五、七月号においては、「資料からみる恩納村の沖縄戦」と題し、現時点での報告という形で紹介しました。今回は恩納村の少年たちをはじめ、中北部の少年たちが動員された遊撃戦―護郷隊の戦争について見ていきます。

召集される十代の少年たちと陸軍中野学校

護郷隊とは遊撃隊の秘匿名で、大本営直属のゲリラ部隊で、正規軍が崩壊したあとも現地にとどまり敵の後方を攪乱し、情報を収集する残置諜報部隊でした。一九四二年にニューギニアで第一遊撃隊が編成、ついでフィリピンで第二遊撃隊を編成されました。太平洋戦争の戦局が悪化する中、来るべき本土決戦にむけての準備期間をできるだけ確保するための持久戦の目的

礼をわすれると拳骨で殴られる人もいました。」

(第一護郷隊・恩納村)

「銃の部品一つをなくすと全体責任ということ、日が落ちるまで、犬のように這って、その日に訓練をした場所を探し回ることもありました。」(第二護郷隊・国頭村)

「何かミスがあると全体責任で対抗ビンタをさせるんです。同僚だから手加減するけれど、手本を見せるといって上官が殴るんです。顎が外れました。」(第二護郷隊・東村)

「軍人勅諭を覚えることができなければ捧げ銃を一時間もさせられる人もいました。小さい体の人は大変だったと思います。」(第二護郷隊・大宜味村)



安富祖小中学校(当時、第二護郷隊の訓練が行われた安富祖国民学校)

を課せられた第三二軍が沖縄において編成したのが、第三、第四遊撃隊です。一九四四年九月から一九四五年三月までに約一〇〇〇名が召集され、その多くは一五〜一八歳の少年たちでした。そのうち恩納村出身の少年たちは三二名です。

部隊編成、陣地選定など遊撃隊(以下護郷隊)の中心にいたのが陸軍中野学校出身の将校下士官でした。陸軍中野学校とは諜報、防諜、謀略、宣伝などゲリラ戦術、スパイ戦術の特殊教育機関です。沖縄戦には四二名の陸軍中野学校出身者が本島北部、離島に配置されました。このメンバーと現地で召集した郷軍人の幹部たちあわせて約七〇名が過酷な教育、訓練を通じて少年たちを「少年兵」にしました。

この護郷隊の名称については、「防諜の意味から、これら二つの遊撃隊は、護郷隊と名づけられた。『自分の郷土は、自分で護れ』というのが軍の沖縄人に与えた大義名分」(「護郷隊」上地一史)とあるように、当時、軍国主義教育の中で育った少年たちのさらなる戦意高揚をはかるために命名されたものといえます。

地元から離れて配置

こうした厳しい訓練の中、護郷隊の配置は護郷隊員の地元から離れた場所への変更を重ねます。理由は精鋭部隊といわれた第九師団が台湾へ移動し、その後部隊の補充なく、現地での配置変更を余儀なくされたこと、県民を総動員して建設した中・北飛行場を米軍上陸時には放棄するという方針転換によるものでした。よって沖縄戦直前では、恩納村出身の少年たちが配属された第一護郷隊は名護・多野岳へ、国頭、大宜味、東、旧越来、美里、具志川村、読谷山村出身者による第二護郷隊は恩納岳に配置されることになりました。(瀬戸)

(次回へつづく)

参考文献

- 「恩納村民の戦時物語」(恩納村遺族会) 二〇〇三年八月
- 「護郷隊」(護郷隊編纂委員会) 一九六八年六月
- 『語り継ぐ戦争 第3集 やんばるの少年兵「護郷隊」―陸軍中野学校と沖縄戦』 二〇一二年三月
- 「沖縄の少年兵 護郷隊」『歴史地理教育』 二〇一六年八月号

過酷な教育訓練

入隊直後から、行軍、爆雷製造、爆破、襲撃、自爆、銃撃など遊撃戦を展開するための訓練が行われました。その中で過酷な体験をした人たちがいました。以下はその証言の一部です。(カッコ内は配属と出身地)

「射撃訓練で標的にあたらなければ、その日の夕食はなし。『弾はお前達よりも高い。はがき一枚でいくらでも兵隊は連れてこられる』といわれた隊員もいました。下士官が歩いていて、敬

護郷隊配置変遷図(名護市教育委員会提供)

図1 第1・第2護郷隊配置予定図(1944年9月~12月上旬)



図2 第1・第2護郷隊配置図(1944年12月上旬~1945年1月中旬)

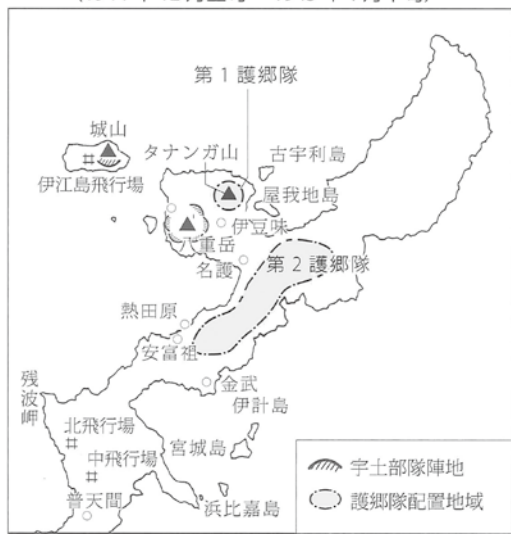


図3 第1・第2護郷隊配置図(1945年1月中旬~)



※『沖縄方面陸軍作戦』付図第三をもとに作成

※『沖縄方面陸軍作戦』付図第三をもとに作成

※『沖縄方面陸軍作戦』付図第三をもとに作成